

米沢有為会 東京支部だより

vol. 25

発行／(公社)米沢有為会東京支部 発行人／菅野 憲幸 発行日／令和3年12月10日
〒182-0004 東京都調布市入間町1-3-6 東京興議館内 TEL/FAX 03-3309-3302
米沢有為会ホームページ <http://www.yonezawa-yuukai.org/>

コロナ禍に始めた2つのこと

須貝 利喜夫



今年度から正会員としてお世話になっております、須貝利喜夫と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

賛助会員として3年前の園遊会(芋煮会)に参加させていただき、とても楽しかったことが思い出されます。一日も早く普段の生活に戻り各種事業や行事が本格的に再開できる日を心待ちにしています。さて、新型コロナウイルスによる感染対策として、自粛生活が続いた訳ですが、コロナがキッカケでチャレンジしたことを紹介します。

一つは早朝のラジオ体操を始めたことです。10年以上通っていたスポーツジムが感染対策で一時閉鎖になり運動らしいことが全く出来ない日々が続きました。運動不足でモヤモヤしていたのですが、近くの公園には通年実施しているラジオ体操会場があることを思い出して、覗いてみました。30人ほどの老若男女がラジオから流れる音楽と掛け声に合わせて、楽しそうに体

操をしていました。翌日、思い切って参加してみました。10分間という短い時間ではありますが、やってみると全身運動であることに気がきました。一つ一つの動きを丁寧にすると全身の筋肉を使うことになり想像以上の運動量になります。第一体操と第二体操がしっかりと出来た時の心地よさかけた！”と思える朝時間です。おかげで体も軽く背筋もピンと伸びたような気がします。現在でも新参者の私にも声をかけて下さる先輩方に感謝しながら通っています。

二つ目は、都市農園デビューです。私の住む墨田区に唯一の農園があり、30家族・団体が週末農業を楽しんでいます。昨年4月～5月の「ロックダウン」のような自粛生活”の時には、ご多分に漏れず私も沈み込んでいました。その中で、土に触れられる農園はリフレッシュの場になりました。ここは完全有機農法が利用

条件なので、栽培では失敗続きでしたが、わずかな収穫量でも喜びがあります。気分転換には旅行がベストです。しかし、県外(都外)移動が叶わなかった時期、週末の農園通いが私にとつての小さな旅気分でした。農園仲間も増え「その苗はどこで買ったの?」あそここのホームセンターに、いい苗が並んでいたよ”など情報交換にも(文字通り)花が咲きます。余った種や苗のお裾分けにあずかり楽しい農園ライフが始まりました。

この夏、農園主催のフォトコンテストがありました。無農菜なので、さまざまなきき物が仮住まいしている様子も作品には写りこんでいました。私も応募し入選(準グランプリ)することが出来ました。テーマは「初夏」です。農園の入り口には暖簾が掛かり、その日は丁度、日差しが小さな暖簾に差し込んでいました。後日、夏の夕暮れ前のほぼ同じ時間に行ってもシャッターチャンスには恵まれませんが、太陽の位置が移動したので、暖簾に日が差さなくなりました。1回目には撮れなかった。1～2分がベストチャンスだったことに気が

づいた瞬間でした。このように、農園部だったり写真部だったりクラブ活動をしているようで、農園通いにすっかりハマってしまいました。何よりも体操や畑作業を通して新たな繋がりが持てたこと、これこそが一番の収穫だった自粛生活でした。

プロフィール

川西町東大塚出身。電機メーカーを経て、現在は株式会社矢野経済研究所に所属。地域活動として総務省行政相談委員(墨田区担当)、墨田区民生児童委員を務めています。



この夏開催の農園写真コンテスト応募作品

東京興譲館寮現在の状況

日頃より寮の運営、私たち寮生の支援にご尽力頂いている米沢有為会の皆様に、令和三年度の東京興譲館の状況をご報告致します。

今年三月に四年生六名が卒業しました。三名が山形に戻り、他三名は東京や福島で就職し、新生活を始めています。

一方、今年度は六名の新入寮生を迎え、新体制での寮生活が始まりました。

四月には、大学の運動部で新型コロナウイルスの濃厚接触者となつてしまった寮生の隔離という大きな出来事がありました。二週間の間、寮母さんや同階の寮生が部屋まで食事を運び、同じ流しやトイレ、洗濯機を使用しないことなどの対応をとり、この期間を乗り越えることができました。

六月には朝六時から昼までの大掃除、そして延期になつていた新入寮生歓迎会を兼ねた打ち上げを行うことができ、親睦を深めるよい機会となりました。しかし翌月、新入寮生のうち二名（兄弟）が都合により転居することになり退寮しました。残念な出来事でした。

寮室の改修工事が六月から約三カ月の間行われ、居室の床のフローリングへの変更、壁の塗り直しをしていただきました。

寮生も部屋の改修に満足しております。

学修状況については、今年に入ってから対面授業のある寮生が増えてきました。また、来年就職を控えている四年生の就職活動も順調に進んでいます。

それぞれ活動をするにあつて外出の機会が多くなるわけですが、寮生全員の協力のおかげで十月現在コロナの感染者は誰一人いません。寮生の多くは学内でワクチ接種を受けています。

緊急事態宣言が解除されましたが、これからも気を緩めることなく感染防止の基本を守り、学業やアルバイトに励んでいきたいと考えております。

コロナ禍での寮生活が始まってから約一年半、様々な点で不便を感じていますが、寮生同士、そして寮母さんとの関わりが増えているのも事実です。

この半期私が寮長としての務めを果たすことができたのも寮生、寮母さんの支えがあったからこそであり、素晴らしい寮生活を私たちが過ごしているのが何よりの証拠だと思っています。自治寮であることを自覚し、各自責任をもって寮の運営にあつております。

（寮長 後藤 洵 記）

新入寮生 「私の抱負」

三浦 稜汰

（国学院大学経済学部、山形市立商業高校）
私は新入寮生ではあるが、すでに三年生である。何か大きな目標を持つて大学生になった訳ではない。学生という日常も秒読みに入っており、残された時間を新型コロナウイルスが猛威を振るう中ではあるが、有意義に過ごしたい。加えて、自分一人での学生生活に至っているのではなく、両親をはじめ多くの人に支えられているので、後悔させないよう胸を張って帰れるようこれからも頑張りたい。

伊藤 翔大

（二橋大学社会学部、長井高校）

私はヨーロッパ史に興味があり、特に中世ヨーロッパの社会史や経済史に強く関心を抱いています。一橋大学はそれらの分野の研究に強いことに魅力を感じ、入学しました。また学生生活を通して、勉強に深く取り組むだけでなく、中学時代からやってきた陸上競技にも全力で取り組んでいきたいと思っています。将来やりたいことはまだ決まっていけないので、大学時代の中でゆっくり見つけていきます。

萩原 斗和

（東京学芸大学教育学部、米沢興譲館高校）

将来、地元である山形で中学校社会科の教員になるために、東京学芸大学へ進学しました。これからの時代に求められる教育について学び、その上で、教員はどうあるべきなのかということを4年間じっくり探究していくつもりです。また、東京興譲館寮での共同生活や様々な場所でのアルバイトなど、大学生ならではの経験を通して、社会に出るうえで必要な力を身に付けていきたいと思っています。

宮田 耕平

（成城大学経済学部、九里学園高校）

僕は自分が持つアイデアを海外事業開発に生かしたいと考えています。そのため、より情報が集まる環境に身を置き、自分の考え方を磨き続ける大学生活を続けています。目の目標はインターンシップです。職場で吸収できるものを全て持って、自分の研究に生かしていきます。今後、この自由で選択肢の多い環境で、自分の好奇心のままに学び、楽しみ、時に失敗していくような理想的な毎日を築いていきたいなと思います。

大掃除後のお楽しみ



新入寮生歓迎会



東京興譲館の 改修工事について

創立130周年記念事業として、学生寮の改修工事の取組の一環で、東京興譲館寮の大規模改修工事を実施しております。昨年は第一段階として、窓サッシ取付、外部壁防水・塗装等を行いました。今年は第二段階として、寮室リフォーム（畳和室からフローリング床化、床下根太更新、遮音対策、押入れ改修等）を6月下旬から開始し9月中旬で完了いたしました。

勉強環境を一層向上させ、安全な施設環境を増進させてゆきます。会員の皆様から頂戴いたしました浄財を使わせて頂き、改めて感謝申し上げます。

新入寮生募集について

来年の入寮生募集も12月から始まります。会員の皆様におかれまして、身近におられる方やお知り合いの方で、来春首都圏の大学に進学される学生がおられれば是非東京興譲館寮をご紹介・推薦頂ければ幸いです。よろしくお願いいたします。（菅野憲幸 記）

令和3年度の4月以降の東京支部の活動状況

▲鈴木信之東京支部長が退任し後任に菅野憲幸氏が就任

支部理事会で鈴木信之氏から本部理事を退任するに当たり支部長辞任の申し出があり審議の結果承認され、令和3年3月末で米沢有為会を退会されました。鈴木信之氏は鈴木会計事務所の代表であり法人会員でした。財務の専門家として現会長の平山英三氏と一緒に内閣府から公益法人の認可を受けるために尽力されました。東京支部の行事などでも中心となって活動されました。私が本部の事務局を担当しているときもサポートしてくださいました。東京支部にとって大きな痛手です。16年もの長い間米沢有為会本部・支部の活動をなされ本当にご苦労様でした。感謝の気持ちで一杯です。令和3年度の新役員による最初の理事会で支部長に菅野憲幸氏が選出されました。

▲東京興譲館長の交代

川合勝雄館長は8年間館長を務めました。その前に金子芳雄館長、沼澤研一館長のときに副館長を務め通算28年になります。本部理事を退任するに当たり、館長も長く勤めれば良い訳でもないの新しい方に交代してもらうために退任することにしました。本部理事会で後任の館長に菅野憲幸氏が選出されました。

▲平成三年度支部総会・新入寮生歓迎会

コロナ禍のため東京支部の「定期総会」は議決権行使書によって議決を行う事にしました。令和2年度の事業及び決算報告、令和3年度の事業計画(案)、予算(案)及び役員改選(案)は、賛成多数で承認されました。東京興譲館は6名の新入寮生を迎えました。残念ですがコロナ禍で支部の新入寮生歓迎会は中止としました。新入寮生の兄弟2名が都合により退寮しました。

▲コロナ感染防止のため園遊会も中止

会員やそのご家族・お友達の方が楽しんでいる芋煮会もコロナ感染防止のため中止としました。

▲学生キャリア支援に向けたトライアル企画について

理事会で寮OBの平山和博さんが、以前やっていた寮生の就職活動支援の復活を提案されて承認されました。宇佐美洵会長のとき寮生の中には、就職先を紹介されその後有為会の役員をされた方も多い。

しかし今は採用方法も変わり若い寮OBを支部の役員になってもらうことを指摘された。そのために若い方として太田勇さん(仙台寮OB)と松寄祐樹さん(東京寮OB)の2人に支部の役員になってもらいました。

○実施目的

- ・置賜出身者を対象にした学生キャリア支援の取り組みを考えるためにトライアルで実施するもの。
- ・キャリアに対する考え、取り組み、悩みなどに関する現状把握を通じて、キャリア支援に対する学生ニーズを探ることを目的とする。

○実施要領(案)

- ・形式: 太田勇理事によるキャリア座談会
- ・日時: 令和3年12月初旬の日曜日(1時間程度)
- ・実施方法: Zoom(参加者は個別端末からアクセス)
- ・対象者: 東京興譲館寮生(学年問わず)

○内容

- ・講師によるキャリア紹介、質疑応答、意見交換
- ネット社会ですから反応が良ければ仙台寮の学生にも拡大できます。今後講師には、役員でない若い寮OBに入ってもらうことも考えられます。有為会の学生に対する育英事業は、寮の運営と奨学金の貸与でその他の学生までは及んでない。昭和47年に大学に入学した諮問委員の仁科義英さん(東京寮OB)は、晩年の我妻榮先生が置賜地方出身の学生たちを学生会館に呼んでくれて講演をしてくれたことを覚えているそうです。

▲東京支部役員名簿

支部長 菅野 憲幸 **副支部長** 川合 勝雄 太田 勇
理事 板垣 史朗 加藤 国雄 加藤 正憲 菊地 隆雄
 工藤 美知尋 倉田 和子 五雲寺 卓
 齊藤 三紀 佐藤 好明 須貝 利喜夫 林 常子
 宮坂 孝夫
監事 片平 善造 松寄 祐樹
退任理事 鈴木 信之 太田 ひろみ 近藤 郁子
 澤田 三根子 鈴木 吉助 羽隅 弘宣
 平山 英三 平山 和博 渡邊 忠義
退任監事 赤井 淳一
 退任された理事・監事の皆様長い間有難うございました。

川合 勝雄 記

新入会員

松 寄 祐 樹



はじめまして。松寄祐樹（まつぎき ゆうき）と申します。米沢有為会には、東京興譲館の寮生、また、奨学生として学生時代四年間大変お世話になりました。この度、東京支部副支部長である川合様よりお声がけいただき入会することになりました。

私は米沢市に生まれ、米沢興譲館高校を2011年に卒業し、早稲田大学理工学部に入學後、情報数理系の研究室にて修士課程を終了し、現在は株式会社リクルートにてブライダル領域を対象に機械学習やAIを活用したシステムの導入などを行っております。

東京での生活が10年を超え、入社後4年半が経ち、こちらでの暮らしにもすっかり慣れたように思います。

同時に故郷の存在が日に日に遠のいていくような感覚があり、どこか寂しくも感じておりました。加えて、新型コロナウイルスの流行により行動が制限され、思うように帰省できない状態が意図せず続き、自分にとっての故郷とは何なのかと自問する機会も増えていました。

先日、久しぶりに帰省する機会がありました。新幹線で米沢駅に到着し、降り立った瞬間の一呼吸目で、自分の中に眠っていた故郷が一瞬にして呼び覚まされたような感覚になりました。

忘れかけていた故郷の空気、その感覚が自分の中に残っていたことが嬉しくそして深い安堵を覚えました。やはり生まれ育った場所は自身のアイデンティティであり、そこにある種のルーツがあるのだなと強く認識させられる出来事でした。

そんなタイミングで、川合様よりお声がけをいただきました。東京にいながらにしても何かしら故郷とのつながりを持ちたい、私が貢献できることがあるなら少しでも力になりたいという思いで、お返事を致しました。

また大変恐縮ながら東京支部の監事に就いてくれないかというお話もあり、若輩者ではありますが私でよければということでお引き受け致しました。

今後は、寮生に対するキャリア支援活動に関わることになっております。自身が寮生だった経験や現役寮生と年齢が近い点などを活かして、同郷の後輩の活躍をサポートできればと思います。将来的には寮生以外の学生のサポートもできればと思っており、同郷コミュニティの活性化に微力ながらも貢献していく所存です。今後ともよろしくお願い致します。



上 杉 神 社

米沢能舞台で能楽の会を

齋 藤 三 紀



米沢は夫（齋藤脩）の生まれた地で、彼は小学校二年までしか米沢にいませんでしたが、景勝公が開基された法泉寺が齋藤家の菩提寺で、米沢には夫の叔母も健在ですので、毎年米沢を訪れ、私にとっても米沢は第二の故郷になりました。

そして、夫に続いて私も有為会のお仲間にいれていただきました。 よろしくお願ひいたします。

私は謡と仕舞の稽古をしていますが、ある時師匠が「米沢には立派な能楽堂があるそうですね、今度そこで会を開きましょう」とおっしゃって、寒河江出身の私がある準備をすることになりました。

会員は、米沢は米沢牛しか知らない、という人たちがほとんどです。米沢を知って頂くいい機会でもありました。

そして、2018年のサクランボの季節に催すことができました。40名の会員に加えて米沢観世流同好会の皆さまにも参加していただきました。

ご存じのように、米沢能舞台はふだんは伝国の杜のエントランスホールにあり、小さい会はそこで催されます。ところが、大きな会や玄人の能の会ときは能舞台がホールの内部に移動されるのです。



上の二枚の写真は違う会場のように見えますが、実は同じホールです。

左の写真の舞台が下に降りて、そこに能舞台が、ホバークラフトの原理で浮いた状態で移動されるのです。そして、能舞台の左側の、能舞台の方を向いている椅子たちも、普段は床の下に格納されているのが、これも一体となって出てきて、能楽堂に変身！

能に興味を持つ人が少なくなっている今、上杉文化を継承するために能舞台を、そして、宝の持ち腐れにならないようにと、このような合理的な能舞台ができあがったのでしょうか、まさに米沢の精神が詰まっている能楽堂だ、と会員たちは敬服しておりました。

その夜は小野川温泉に一泊し、蛍の乱舞を見、米沢牛をいただき、翌日は貸し切りバスで米沢観光、舘山でサクランボ狩りもして、会員たちは皆米沢を大好きになって帰ってきたのでした。

『甦る米沢海軍—その人脈と消長』

工藤 美知尋 (日本海軍研究家)



特別寄稿

今から40数年前の昭和55(1980)年3月、「米沢海軍武官会」から『遠い潮騒—米沢海軍の系譜と追憶』と題する私家版が刊行された。この本の著者は、米沢興譲館中学から海軍兵学校(75期)に入学した松野良寅(よしとら)氏である。海兵自体は78期の入学生受け入れまで続いたが、昭和20年8月15日の終戦当時、松野氏はまだ在学中だったため、幸いにも前線に出ることはなく、戦後生き延びることになった。

太平洋戦争では、米沢興譲館中学、そして興譲館より30年遅れて西置賜の中核校として大正9年創設した長井中学から海兵に入り前線に出た前途を嘱望された海軍士官の多くが散華した。しかしながら既に将官となって予備役に編入されていた海軍軍人や松野氏のように前線に赴かなかった海兵の生徒だった方は、戦後復興がなされつつあった昭和30年代から、親睦のため「米沢海軍武官会」なるものを創って、後世の人達に向けて米沢海軍の記録と啓蒙を行おうとした。具体的成果としては、米沢興譲館・長井中学から海軍士官になった名簿の作成である。

昭和40年頃といえば、将官だった方もまだ70～80代で健在であり、頭脳もしっかりしていた。数年に一度、米沢や白布高湯温泉などに集っては親睦を重ねた。

幸い当時の防衛庁戦史室(現在の防衛研究所)には、小田切政徳大佐が戦史編纂官としておられたため、詳細な士官名簿(厚生省年金局保官)や、防衛庁が保管している米沢海軍にまつわる様々な資料を松野氏に送付し、これに基づいて松野氏は数冊の本にまとめた。

ところが「米沢海軍武官会」は基本的には親睦のための会だったため、米沢海軍の消長を日本海軍史の中で評価する研究を行わなかった。行わなかったというよりも、武官会のメンバーが高齢のため次々に亡くなり、活動が出来なくなったというのが正確である。

私は昭和48年頃より5年間ほど学位論文『日本海軍・太平洋戦争開戦原因論』の執筆のため、毎日のように市ヶ谷にあった戦史室に通い、「日本海軍が何故太平洋戦争に突入したのか」の研究に明け暮れた。その過程で、戦史部の部内研究会などで、何度か小田切戦史編纂官にお目にかかっている。その後小田切大佐は他界し、平成24年には松野氏が、また米沢海軍武官会の最年少のメンバーであった近藤鉄雄氏(元衆院議員)も平成22年に逝去された。こうして「米沢武官会」は消滅したまま、今日に至ることになった。

米沢・長井地区の置賜盆地は、四周を飯豊山と吾妻連邦に囲まれ、全く海に面していない。今では高速道路網が張り巡らされて、この地から日本海の村上市瀬波海岸迄1時間ほどで行けるが、かつてこの地で生をうけた人間の多くは、海を見ずに過ごしたものである。にもかかわらずこの地から、日本海軍を背負った鹿児島・佐賀県に次いで実に多くの海軍将官が輩出した。その理由は何故か?そうした将官たちは、如何なる運命を辿ったのであろうか?そのような事を拙著では書いてみたいと思っている。完成は来年秋を予定している。

望郷のことは

千行易落他郷淚
尺素難裁異客愁

細井 平洲

せんこう
千行落ち易し他郷の淚

せきそた
尺素裁ち難し異客の愁ひ

(故郷から離れている者は何かにつけて感傷的になり、涙を流す。懐かしい手紙を手にしても旅人であることの愁いからは逃れられない。)

米沢ともゆかりの深い細井平洲の詩句である。乗り物や通信手段が発達した現代において、このコロナ禍は突然人の移動を制限し、一挙に平洲の生きた江戸期を思わせる世界を現出することになった。

不思議なことである。コロナ禍のマイナスマスは声高に叫ばれる。

しかし、毎日の生活に埋没してしまっていたことを蘇らせてくれた効用については、誰も顧みない。

どんなに便利になっても東京支部と置賜地方の距離は変わらない。時には流れている時間さえも異なる。私たち東京支部の者に故郷との時空の隔たりを再認識させ、そこから新たにピントの合った故郷の姿を見つめることの大切さを教えてくれたのが、コロナの効用であった。

特別寄稿

「八月や六日九日十五日」
の名句から学んだワタシ

米野 宗禎



世界中が新型コロナウイルスという新たな脅威と闘う中、東京五輪が開催されました。久々の「につぼん晴れ」でした。「八月や六日九日十五日」の句の「日」は今年七十六回目を迎えました。

この一句は日付を重ねるだけで日本の重い歴史が語られるとして評価され、多くの人が詠んだ作品だそうです。（私めも創ったことにしようかな？）
「八月や」とのご縁ですが、小生大学を卒業して、一宗一派によらない「真理運動」を展開される神田寺、友松圓諦老師に弟子入りしました。老師の孫娘の摩耶さんが句会の「鴻」（こう）発行所の編集人を勤めておられ、ある日「八月や・・・」で実は私の作品だ！など仲間揉めして困ってる」という話でした。小生出版会社で編集の仕事をしておりましたが、俳句の世界に疎く、少し資料を送っていただくことにしました。

「鴻」俳句会に自分が作ったとも思っておられた小林良作さんという方が、俳句探偵と称して全国を探し訪ねられた由として大分県宇佐市に「八月や」の句碑あり作者は広島県尾道市の医師・諫見勝則（一九九二年）さんと突き止められたと云われます。

その後国会図書館典拠データによると小森白芒子の自分史「壺中の天」（一九七六年）の句集の中にすでに所収されている、ことが判明したとのことでした。



大分県宇佐市の市史跡

そして「鴻」の編集長の難題について記させていただきます。

小生、駒沢大学一年生で上京し米沢有為会新宿の寮にアブローチしましたが七倍（昭和三十年）で入寮がダメ。大学の寮に入りました。そこに山形で「山びこ学校」で名を馳せた無着成恭先輩が三年生に編入学されてのご縁です。

（山形師範学校は戦後短大卒）
「東京私立明星学園の理事長に、いずれ教頭・校長にするには四大を卒業してこい！」と云われたとか。

寮では「君は米沢、オレは山形」同県人の誼もプラスして坐禅堂、キャンパスを共にし学ぶ日々でした。今、先輩は九十四歳、千葉県に在る小さな寺を「人間道場」として元気にしておられます。そこで「八月や」の件を話しましたところ前から永君とも話をしたことがあるが！と次の手紙をいただきました。早速、悩みを抱えている摩耶さんに贈りました。

文面は次の通りです。

「八月や六日九日十五日」
私達の間では有名な句です。この句の簡潔さと明快さについて永六輔さんとも話したことがあります。この句がこういう本になって沢山の人の目に入るようになったことを喜びます。

オレの句だ！なんて言わずに、あちこちに句碑を立ててくれるとうれしいです。

「オレが作った句だ！」なんて言わずに日本人の口の端に上るようになったら大成功ですネ。この句を読んだ八月六日は何だったか、八月九日は何だったか、八月十五日は何だったか。わからない日本人が増えたら、日本は滅ぶときですね。」

（二〇一七年八月十九日）

※「八月や」その後」を閉じるに当たり小林良作（著者）は無着さんのことばに次のように記しております。

『成恭氏の往年の「全国こども電話相談室」の声が聞こえて来るようだ。この一文が「八月や」を追った私の今の気持ち余すところなく代弁して下さった。と書き添えて筆を擱きたい。』

（二〇一七年十二月完）

この無着先輩の苦言（？）で日本俳句会の戦いも収束した由。小生もチョピットの役割もあつたのかな！

ところで、ご承知の通り日本は唯一の被爆国です。

広島・長崎の悲劇を世界に伝えることが責務で、日本のこの体験は最初に最後にしたいものです。昨今、娑婆で云われチラカッテいる平和ボケ、昼行灯の日本人ではなく、真の平和を追求する覚悟を

「八月や」から汲み取りたいものです。戦争・原爆の惨禍を直接体験した人が日本人の

一割を切って減っているとか。

さてもう一言、五年程前にある講座（シンポジウム）を受講しました。シンポジストの一人東大教授が大学院生四人を連れて来られ、終了後、食事会があり小生と同じテーブルでした。そこで「八月や」を口にしましたら句の中味が広島のことで云ったら

「あ！長崎、終戦日だ！」そして四人がカバンから手帳を出して、「八月や六日九日十五日」を記しました。大学では教えることがないから！と笑顔で応えるのでした。

さて、米沢有為会の寮生はどうかな！

終りに昭和二十年八月十五日の私めの体験です。私は犬掻きを覚えたこともあり朝から泳ぎに出かけました。最上川の上流から帰ると茶の間に畑仕事を手伝っている馴染みのSさんと盆の墓参りに来られた檀家の二人が正座しておられました。早速、お前も座れ！と親父に諭されました。

今から天皇陛下のお言葉を謹聴するというのです。ラジオを前にして重苦しい空気が漂っておりまして。のちに知る玉音放送です。私にとつて文言などチンプンカンプンでしたが、「神風は吹かなかつたんだあー。戦争が終わったんだあー。兵隊さんにならなくていいんだあー」と感じとるのでした。とは申せ、ラジオを切ると、「アメリカ兵が上陸してきたら、竹やりで殺して、自分も死ぬ」などと語りあわれていましたから、目や舌が立って立ってかけてある竹ヤリの方に向かうのでした。彌が上にも不安と緊張の時空を覚えた、小学校三年の夏のことでした。以上。

（令和三年八月十五日記）

本の紹介

『不死身の特攻兵』 軍神はなぜ上官に反抗したか

著者 鴻上 尚史 講談社現代新書

岩本益臣大尉は、陸軍第一回の特攻隊「万朶隊」の隊長です。不死身の特攻隊員佐々木友次伍長（21歳）に大きな影響を与えました。岩本隊長に出会わなかったら最初の出撃で戦死されていたでしょう。岩本隊長は、陸軍士官学校を出た28歳。操縦と爆撃の名手であり、戦局打開のための「跳飛爆弾」の第一人者だった。

「跳飛爆弾」とは、爆弾を直接、艦船に投下しないで、一度海に落として跳ね上がらせ命中させる方法で、ちょうど水面に向かって石を横投げすると、幾段にも跳ねて飛ぶのと同じメカニズムだ。爆弾を上空から落とすより、うまく海上を跳べば艦船に当たる可能性は上がる。艦船の側面、水面に近い部分が破壊された方が沈没する可能性が高まる。通常爆弾なのに、魚雷のような働きをする爆弾方法なのだ。

岩本大尉は、米軍の成功を睨んで、「跳飛爆弾」を積極的に進めようと研究と演習を続けていた。

九九式双発軽爆撃機は、機首に、旋回銃座がついている。ところが、与えられた九九双軽は、機関銃自体が取り払われ、死のツノが飛び出ている。後部にあるはずの二つの旋回銃もなかった。この改装が後で悲劇をもたらす。飛行機は、爆弾が機体に縛りつけられていた。参謀本部は、もし操縦者が卑怯な未練な気持ちになっても、爆弾を落とせず、体当たりするしかないように改装したのだ。

岩本隊長は、結成当初から「体当たり」攻撃に真っ向から否定していた。

岩本隊長は、操縦席から爆弾を投下させないように改装された（爆弾を抱えたまま突っ込むことしかできない）特攻使用機を、将校仲間の協力で投下できるように「再改装し、隊員に向かってこういう。

「このような改装を、しかも第四航空軍の許可を得ないでしたのは、自分の生命と技術を、最も有意義に使い活かしているだけ多くの敵艦を沈めたいからだ。こんな飛行機や戦術を考えたやつは、航空本部が参謀本部かしらんが、航空の実際を知らないか、よくよく思慮の足らんやつだ。」

「出撃しても爆弾を命中させて帰ってこい。」と訓示した。「万朶隊」の出撃の前日に、

儀式好きの富永恭次司令官から岩本隊長以下5名の将校との宴会のためマニラに来るように命令を受けた。機関銃を取り外した九九双軽でマニラに行く途中に米軍のグラマン戦闘機に襲われて墜落、岩本隊長以下4名の将校操縦者が機関銃掃射を受けて即死し一名は重症だった。富永司令官は、航空戦を全く知らない人物なのに、なぜフィリピンの空を戦う第四航空軍の最高司令官なのか、もちろん理由があった。富永司令官は、東條英機首相（兼陸軍大臣兼参謀総長）のお気にいりで、陸軍次官と人事局長兼任していた。東條首相がサイパン陥落の責任取って辞職した。反東條派はこれ幸いと富永次官をフィリピンの第四航空軍司令官に転任させた。富永司令官は、陸戦の経験さえほとんどなく、航空戦に関しては、全く無知で経験もない人物が、激戦のフィリピン航空軍の総帥司令官になったのだ。軍隊は、階級社会である。命令は、絶対だ。その命令がどんなに無意味でも不合理でも、絶対服従が軍隊のルールである。それが軍隊を軍隊たらしめている唯一の原則だ。

佐々木伍長は、1944年11月12日に初めての出撃を果たす。戦果は大本営から大々的に発表された。佐々木伍長は名誉の戦死を遂げたとされ、



比島の空を出撃する佐々木伍長機

故郷北海道では「軍神」とあがめられて大きな葬儀が営まれた。その後佐々木伍長が生還するたびに、猿渡参謀長から「今度帰ったら承知せんぞ!」「突っ込んで死んでこい。」と叱咤され続けた。12月18日までのわずか一ヶ月の間に9回の出撃を命じられ、「処刑飛行」ともささやかれたという。

では、「上級下級の区別なく、新聞記者にも」このように広言した佐々木伍長ですが、戦後は、特攻体験を語ろうとしなかった。

佐々木さんは、2016年2月北海道で九二歳の長寿を全うして亡くなられた。佐々木さんのお墓には、まだご存命のときに、友人と相談して作られた次の文章が刻まれている。

哀調の切々たる望郷の念と
片道切符を携え散っていった
特攻と云う名の戦友たち
帰還兵である私は今日まで
命の尊さを噛みしめ
亡き精霊と共に悲惨なまでの
戦争を語りつぐ
平和と永遠なれ

鉾田陸軍教導飛行団
特別攻撃隊
佐々木友次

この本の第2章「戦争のリアル」は、高木俊朗著「陸軍特別攻撃隊」上巻・下巻（文藝春秋）に準拠して記述されています。

川合勝雄記



米沢藩初代藩主景勝公の生涯

上杉 邦憲 米沢有為会 名誉会長

来年（2022年）、米沢藩初代藩主上杉景勝公（1555～1623）は四百回忌を迎えます。長尾政景と謙信公の姉・仙桃院の間に生まれた景勝公の六八年の人生は、一人の人間の人生として、波乱万丈という言葉では言い尽くせないほどの壮絶な人生でした。

謙信公急死後の「御館の乱」に始まり、武田勝頼との同盟と織田信長との対立、魚津城の戦いと本能寺の変、秀吉への臣従、小田原攻め、朝鮮出兵、会津への国替え、秀吉の死、会津征伐と長谷堂城の戦い、米沢移封、大阪冬の陣、夏の陣を経て、最上家をはじめ諸大名の改易が続く中、心休まる時は無かったことでしょう。数え切れぬほどの苦難と存亡の危機を乗り越えた景勝公の胸にあつたものは「何」としても謙信公の精神を受け継いで上杉とその領地を守ること」だったのではないかと思います。

謙信公の薫陶を受けた景勝公は論語に通じておられまして、当然、論語第一五・

衛霊公篇第2章にある「君子固より窮す。小人窮すれば斯（ここ）に濫す」をご存知だったと思います。これ即ち、君子とてもとより窮地に陥ることはあるが小人が窮すれば取り乱し愚行に走るのと違い、君子は動ぜず良策を得る、という意味で、孔子の実際の経験から来た言葉だそうですが、景勝公の思いは「義」を貫いて滅びることではなく、「義」と「仁」愛の心を以て生き抜くことこそが、謙信公の精神を伝えることと思われたのではないのでしょうか。

そして、領主としての景勝公は領民を愛する人でもありました。天正一九年（1591）に景勝公が發布した覚書（平成一〇年十一月米沢直江会発行「龍師火帝」第十九号より）は治民方針の鉄則ともいふべきもので、以下のように書かれています：

覚

一、頭の正邪に依り、百姓善悪にうつり候ものにて候。
二、年貢諸掛等はなる程勘弁いたし、悪作の年は前年より小分たるべき事。

三、何事も古法を守り利慾のために新法を立て、百姓を苦しませ申すまじき候こと。
四、忠孝の道理、常々教訓致すべき事に候。女共へは貞節の道理自然に相分り候よう肝要。
五、年貢等、取り集めの役人共、百姓へ対し、がさつの儀無いよう申し付け候こと。
六、百姓は国の宝に候あいだ、なる程堪忍致すべく候。
七、訴訟は双方共よくよく聞き糺し沙汰致すべき候こと。必ず依り買賈致すまじき候こと。
右の条々、堅く相守り申すべき候、以上 景勝 花押

これは、単に年貢を取るために農民を大事にしろ、と言っているのではなく、謙信公の言葉「常に厚く仁を施し、あまねく徳を布くならば、子孫の代に幸いともなるであろう」を受け継ぎ、やがては鷹山公の「伝国の辞」へとつながる領民への愛情というものが感じられるように思えます。

今年の7月、歴史作家で米沢温故会会員の今福匡氏が、角川新書から「『東国の雄』上杉景勝」という評伝を出版

されました。副題にあるように、正に「謙信の後継者、屈すれども滅びず」、幾度の危機を乗り越え現在まで続く米沢の礎を築いた景勝公の一生が、とても詳しく著わされています。興味ある方に一読をお勧めいたします。

龍師火帝の碑
堀立川

新年会・予餞会のご案内

日時:令和4年2月12日(土)

12時半から14時半

(12時受付開始)

会場:主婦会館プラザエフ

編集後記

▲万葉隊隊長の岩本益臣大尉は、操縦者も飛行機も足らない状況で一度だけの攻撃で終わるのは不合理と考え改造した。航空戦に全く無知な司令官の理不尽な命令がなかったら、戦果を上げ特攻隊の在り方に影響を与えたと思つと至極残念です。富永司令官は、満州で終戦を迎え、ソ連軍の捕虜となり、十年間の捕虜生活を終えて帰国している。

▲佐々木伍長の父親は、日露戦争のとき、旅順の203高地を攻撃する決死隊の生き残りです。親子ともは、奇跡です。

父親は、「人間は、容易なことで死ぬもんじやないぞ」と教えている。
(K・K)

編集委員メンバー

委員長……………川合 勝雄
菅野 憲幸／佐藤 好明
菊地 隆雄／工藤美知尋
齊藤 三紀／宮坂 孝夫